

「流域のこれからをみんなで考える シンポジウム」について

里山学研究センター 博士研究員
太田 真人

2016年1月29日に大阪府立国際会議場にて、関西広域連合主催の「流域のこれからをみんなで考えるシンポジウム」が行われ、意見交換を行ってきたのでその内容を報告する。
プログラムは以下の通りであった。

基調講演：

「琵琶湖・淀川流域の発展とこれからの治水」

中川博次（京都大学名誉教授、琵琶湖・淀川流域対策に係る研究会 座長）

特別講演：

「生態系サービスと流域マネジメント」

中村正久（滋賀大学環境総合研究センター教授、
琵琶湖・淀川流域対策に係る研究会 副座長）

パネルディスカッション

パネリスト

「流域に“ソーシャルイノベーション”を ～視点を変えて未来をみる～」

秋葉芳江（Office SPEC 代表、京都市ソーシャルイノベーション研究所）

「地方の挑戦が日本を変えるー持続可能社会を目指して」

戸田 香（神戸大学大学院法学研究科（政治学）博士後期課程、
朝日放送㈱総合ビジネス局）

「公共景観づくり 事例紹介」

横山あおい（㈲エイライン代表、NPO法人 人と自然とまちづくりと理事長）

山口美知子さんはインフルエンザの為欠席

関西広域連合が平成26年7月から平成28年6月まで設置している「琵琶湖・淀川流域対策に係る研究会」の拡大研究会であった。参加者は研究者や県などの行政関係が多いようであったが、一般の市民も参加していた。講演ではこれまでの琵琶湖・淀川流域の変遷や治水・利水の歴史などが紹介された。また、これまでの「琵琶湖・淀川流域対策に係る研究会」で話し合われた琵琶湖・淀川流域において取り組むべき課題や統合的な流域管理の可能性、流域生態系

サービスの仕組みなどの説明がなされた。

パネルディスカッションではパネリストがそれぞれ流域に関連付けた各自の専門分野についての紹介を行った。その後、終了時間が来ていたが「流域の今後を考えるにあたり大切なことは」というお題について、持続可能な社会をしっかりと作る。持続可能は同じことの繰り返しではない。ソーシャルなイノベーションが重要。暮らしの先に文化がある。人の中に未来を見る。社会は人が続くことである。流域というものを考える場合三層で考える。一層は私たちの何かなどWe。二層はコミュニティ。三層は国などではないグローバルガバナンスが重要であるという意見や持続的可能なフローを作る。ストックとしての森、そこをどのように人が利用をするのか。地域にある資源をどのように使うフローを作るかが重要という意見が出た。また持続的社会という単語が一般的、生活的用語ではないのでわかりやすい単語に言い換えるとどうなるかとお題に対し、持続可能=子供たちにつながるや当たり前のこと=持続可能という意見であった。また参加していた市民の方から流域市民軸に。もっと簡単な言葉で市民に知らせてほしいとの意見も挙がっていた。また、研究者からもっと関西広域連合には挑戦的な意見や課題を国などに突き付けてもらいたい。今のままであれば国の役人は「はいはいよくわかります」というような流す態度しかとらないだろうという意見も出ていた。